World View アジア発

シリーズ「アジアほっつき歩る記」第72回

台湾の選挙結果と今後

須賀（すが）　努（つとむ）
コラムニスト・アジアンウオッチャー

日本人観光客が中国に行かなくなって久しいが、その代替訪問先となっているのが台湾である。何となく親日的で食べ物がおいしい。さらには、日本のカルチャーがそこそこ入っており、何とも居心地が良い空間、それが台湾のイメージかもしれない。

だが、現実の台湾は、政治的、外交的にも常に厳しい立場に置かれており、決してお気楽な場所ではない。昨年11月には、４年に１度の統一地方選挙があり、４年前以上の激震が走っている。最近、滞在する期間が長くなっている台湾の現状と将来を選挙結果から見てみたい。出来れば台湾を訪れる日本人にも、もう少し台湾をよく知ってもらいたいと願っている。

選挙結果について

台湾の統一地方選は、６大都市（台北、桃園、新北、台中、台南、高雄）の市長選を含めて22市県の長および市議県議を選ぶ直接選挙となっている。今回の選挙では、６大都市の市長選（国民党３、民進党２、無所属１）とそれ以外の県長選を合わせた22選挙区のうち、国民党が15で勝利（民進党は６）し、事前予想をはるかに上回る野党の圧勝、いや与党「民進党」の大敗北に終わった。

選挙前から、『民進党への支持は離れている』、と言われてはいたものの、これまで民進党の地盤と言われて20年間市長の座にあった高雄市長選挙において、泡沫候補と言われていた国民党の韓国瑜氏に敗北したことは衝撃であり、この選挙を象徴していたかもしれない。韓氏は台北県生まれの外省人。正直、南部高雄で好まれるタイプの人物像からはかけ離れている。

写真１　台北市内の選挙ポスター

だが、彼の主張は非常に分かりやすく、『高雄を台湾一豊かな都市にする』と謳っていた。前回の選挙で民進党が示した『中国とは距離を置く』という外交姿勢が否定され、外交よりも経済、特に台北一極集中に反発する南部の状況を表している。韓氏陣営が作成した選挙動画では、南部には仕事がなく、やむを得ず台北などで働く人々、俗に『北漂族』に対して『高雄に戻っておいで』と訴えかけており、全く関係ない筆者などが見ても、涙を誘われてしまうものだった。

台中でも、民進党の次代を担うとも目されていた現職の林佳龍市長が、とくに有名でもない国民党の女性候補に敗北。筆者は台中に何度も行っているが、台中市民の知り合いからも『今の市長はよくやっている』と聞いており、まさか落選するとは思ってもみなかった。ただ、他の友人は『林市長には確かに実績はあるが、エリート意識が強すぎて、気に入らない』との話もあり、蔡総統を頂点とする保守エリート層と化した民進党への批判がここに出ていたのかもしれない。

今回の選挙結果は、蔡英文政権への失望、そして保守化した民進党への批判などが浮かび上がってく

撮影：佐渡多真子

【須賀努氏のプロフィール】
東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾２年、香港通算９年、北京同５年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

る。特に、内政の重点政策であった年金改革では退役軍人や教員などの反発も多く耳にしており、また、労働法改正では、多くの企業経営者の失望を誘ったのは事実である。

ただ、筆者の周囲にはその仕事ぶりを評価する向きもあり、『蔡総統の政治手法には問題があったが、やろうとしている改革は間違いではない』との意見もよく聞く。むしろ、前回選挙で国民党が敗北し、民進党政権に移行した理由は、『馬英九前総統があまりにも不人気だったから』との声があり、この要素を含めて検討する必要がありそうだ。

中台関係と今後

今回の選挙に関して、台湾内外で『この結果は中国の不当な介入によって引き起こされた』といった意見がかなり出ており、日本のマスコミも対中国関連でこの選挙を報道するケースが多い。だが、現実はこれまで述べたように『台湾内の問題』が大きいと思われる。

2019年は年頭から、習近平主席と蔡総統の重要演説があり、中台の応酬が見られた。蔡総統が『中台統一は受け入れられない』ときっぱり宣言したことで、筆者の周囲でも称賛する声が出ている。民進党と言えば、以前は『台湾独立を目指す』と思われてきたが、現在の党内に『独立派』と呼ばれる勢力は影が薄い。一般の台湾人も『独立するのではなく、既に独立しているので、現状維持が前提。その中でどの程度中国と付き合うかを議論している』との考えが主流だと思われる。

ただ、中国側はあくまで統一を目指しており、今回は中国側の思惑通りになったともいえる。選挙後すぐに中国から『高雄の農産物を買う』などのオファーが来ているとも聞き、また、中国人観光客が『高雄、台中ルート』（今回の選挙で国民党が勝利した市）にやって来るとのうわさも耳にしている。

外交より経済となれば、高雄のような都市は今後中国と直接交渉しかねない状況にあるが、はたして、それを国民党は許すのだろうか。『武士は食わねど高楊枝』などという言葉も聞かれた４年前とは様相はかなり変化し、台湾内の分裂が中国の攻勢を強めることになりかねない。

選挙後、蔡総統は党主席を辞任したが、年明けに行われた新主席選挙では、蔡氏と関係が深い人物が当選、2020年の総統選挙に蔡氏が再出馬する方向だと見えられている。ある専門家は『蔡氏が次回総統選で勝てる見込みはなく、民進党は別の有力候補を立てる必要があるが、歴代総統は皆２期務めており、現職に対して不出馬を説得するのは難しい』と見ている。

同時に、この勢いであれば国民党が有利ではあるが、目ぼしい次期総統候補がいないという、最大の問題点もあり、来年が一体どうなるのかは、当の台湾人にも予測がつかない情勢だと言える。『今回の選挙結果がどうであれ、これは台湾人自らが民主的な方法により下した判断』と言っていた、テレビアナウンサーの言葉は視聴者にどう響いたのだろうか。

写真２　辞意を表明した頼清徳行政院長